

海外の動向

サラムの湯川観

ほっきょう

法橋 登

日本物理学会は、1976年8月の創立100年記念行事としてトリエステにある国際理論物理学センターのアブダス・サラム所長を招いた。私はたまたまこの年の12月にトリエステの近くに用事があり、基礎物理学研究所の早川幸男先生から一筆いただいてサラムを訪ねた。早川先生の一筆には記念行事に出席できなかったサラムへの簡単な報告も含まれていた。早川先生は、センターの理事でもある湯川先生の代理としてセンターの運営会議に出席されたこともある。

私がサラムを訪ねたとき、センターではロンドン在住の科学哲学者ポパーとスイスの大脳神経生理学者エクルスの討論録『自我と脳』¹⁾が話題になっていた。サラム夫人は当時オックスフォードで生物物理を教えており、サラム自身も生命物質左右不斉の素粒子起源に関する論文を分子生物学誌に書いている。『自我と脳』では、大脳左右半球による時間(左)・空間(右)認識と情報の分析(左)・総合(右)機能の相補的分担など、現代脳科学の研究成果の上になって、生物進化の到達点の両極にある自我と脳の相互作用が議論されている。書名は脳に対する自我の優位を暗示している。

サラムは私にこんな質問をした。

「西洋の科学者の発言は会議の前半に多いが、

湯川の発言はいつも会議の終りの方だ。どうしてか」

私は

「前半の議論は分析的、後半は総合的」

「湯川は会議の流れのなかで理想を話す機会を待っていたのだと思う」

「自我が対決する討論によって歴史を進めてきた西洋と脳全体の共感が得られる機会を待つ東洋の文化の違いもあるのではないか」

などと場当たりの答えをしたが、サラムは

「文化伝統が違うのにハイゼンベルクは湯川と同じタイプで、西洋では例外だ。東洋でも中国の物理学者は現実的であり、湯川は別だ」と話した。

プリンストンのダイソンは、米物理教育誌²⁾で湯川とハイゼンベルクを「理論の成功より深さを求める思索者」とよんだが、イスラム教徒であるサラムにとっても湯川とハイゼンベルクは文化伝統や専門分野を超えた特別な全人的存在として印象に残ったのだろう。

参考文献

- 1) カール R. ポパー, ジョン C. エクルス共著 (大村裕, 西脇与作, 沢田允共訳)『自我と脳』新思索社.
- 2) F. Dyson, Am. J. Phys. 58 (1990) 209.